

「彦根城を世界遺産に！」のフィールドワークに参加して



大名庭園から見た彦根城天守

彦根城は、30年も前に世界遺産の暫定リストに記載されて以来、長らくずっと塩漬けのような状態にあります。しかし近年では、新たな価値での登録を目指して、彦根市の彦根城世界遺産登録推進室を中心に、滋賀県や彦根市が日頃から様々な取り組みをしています。この新たな価値とは、「徳川期の大名統治システムを示す建造物や考古学的遺構が1つの城の中に残っており、約250年のパクス・トクガワナ（徳川の平和）を体感できること」にあります。構成資産の区分けとしては、①堀と石垣、②御殿、③重臣屋敷、④大名庭園、⑤天守となり、大名統治システムという目に見えない概念が、これらの資産によって可視化されている点が大きな特徴です。日本国内はもとより、世界的に見ても、これらすべてを網羅し、一体的に遺されている城郭は、彦根城のみとされています。世界遺産登録にあたっては、登録基準(iii)または(iv)の適用、そして、完全性・真正性の証明を期待し、2026年の国内推薦、2027年の推薦書の提出およびICOMOSによる現地調査、2028年の世界遺産登録!!という、流れが想定されています。

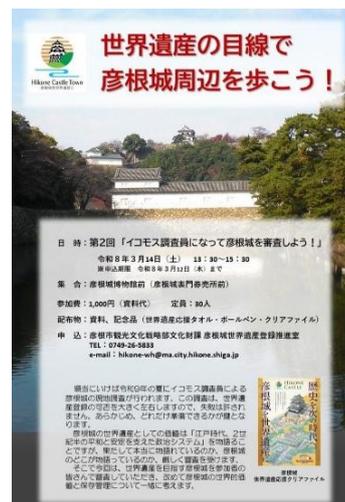
彦根城世界遺産登録推進室では、シンポジウム（2025年11月に宮澤WHA主任研究員が登壇）やフィールドワークを実施し、地域の理解と賛同を得るための活動を積極的に展開しています。去る2026年3月14日（土）には、「イコモス調査員になって彦根城を見てみよう！」と題するフィールドワークが開催され、私も参加してきました（参加者は約30名）。このプログラムでは、ICOMOSの現地調査を想定し、①信用できる資産であるか、また、遺構が適切に残されているか（完全性・真正性の確認）、②保存管理の状況、③来訪者対応・地域との関わり、という観点から、コア・エリア（中堀の内側）を実際に歩きながら検証を行いました。私自身もICOMOS調査員の視点で、個々の資産のみで価値を証明することは容易ではないものの、コア・エリア全体としては、多様な建造物や遺構が良好に残存しており、総合的に見れば、新たな価値での登録が可能ではないかと思いました。今後は、来訪者向けに、各建造物や遺構が、軍事的なもの、統治（合議体制など）に必要なもの、大名の生活や社交に必要なもの、機能別に色分けされた説明板が整備されれば、大名統治システムの理解がより深まるのではないかと考えます。



また、保存管理に関しては、彦根城は築城時の背景もあり（関ヶ原の戦い後、大坂に対する牽制のため、築城を急ぐ必要があった）、近隣の城から移築された建造物が多い点も、大きな特徴です。天守は大津城、天秤櫓は長浜城、太鼓門は佐和山城、西ノ丸三重櫓は小谷城から移された、と伝えられています。こうした移築の手法は、結果的に資源の有効活用という側面をもち、今日で言うSDGs（持続可能な開発目標）の先駆けだったのではないのでしょうか。もちろん400年前にその概念が確立されていたわけではありませんが、この点は、国際社会への積極的なアピールとなり、さらには未来に向けた新たな価値の提示にも繋がると考えられます。

彦根城の世界遺産登録については、「大名統治システムを海外の人に理解してもらえるのか」、「技術的な内容を多言語で伝えるのはハードルが高いのではないか」など、色々な意見があります。しかし私は、彦根城は世界遺産とすべき存在であり、世界遺産登録を通じて、日本史上特筆すべき徳川時代の平和を支えた統治システムを、国内外に広く伝え、未来へと継承していくことが重要だと思います。

WHA 会員の皆様には、“パクス・トクガワーナ”という視点で、ぜひとも彦根城に足を運んでいただき、世界遺産に向けた活動のご理解と賛同を賜れば幸いです。



2026年3月15日

WHA 賛助会員、WHA 認定講師、世界遺産検定マイスター

林 篤幸